

【翻 訳】

R. S. トーマス詩集『霊の実験室』

訳 矢 口 以 文
ロバート・ウイットマー

抜け出す

神よ 私はかつてのようには祈らない、
私の人生は以前のものとは違う。
あなたも機械の存在を
受け入れますか。かつてはあなたに癒しを
願ったでしょう。今は医師に治療され、
罪を感じないで兄弟の血を
飲み、肉体を
外科用メスの書く偉大な詩の
原稿として貸し与える。私は長く跪まずき
あなたと格闘して疲れさせたかった。
主よ 祈りを聞いて下さい、祈りを
聞いて下さい。まるであなたの耳が
遠いかのように 多くの人はかん高く叫んで
あなたの沈黙を説明するが
不適確だ。

祈りはこのようなものではないことが
明らかになり始める。
祈りは違いの消滅だ、
あなたの中に私がおり、

私の中にあなたがおられるという意識だ —
自然の青年期から 精神の
成熟した幾何学へ抜け出すことだ。私は
新しくあなたを認識する、形と数の神よ。
答えが私たちであるような疑問がある、そのこだまを受け入れるために
私たちが大きくならなければいけないような
他の疑問もある。私たちの道は循環していても
あの蛇の出没する庭に
つながっているのではなく、盞の実験室である
背の高い ガラスの都市へ続いている。

手

それは手だった。神は見て
目をそらした。神の心には冷やかさが
あった、まるで手がそれを握り
しめたかのように。手が建てようとする都市と
それを破壊しようとして使うエンジンを
神は暗いトンネルの
むこうにあるかのように眺めた。視力が
ぼんやりしてきた。指の関節をほどこう
という誘惑にかられて、神はその手を持ち上げた。
しかし手は神と格闘した。「あなたの名は
なんですか？ それをまばゆい金色で
書きますから。なさなければいけないことが
あるではありませんか？ 子供を作ったり、
詩を書いたりすることが —。世界は
無意味なので、私を待っています」と手が叫んだ。
しかし神は脇腹に釘を感じ、それとの接触の暖かさに
気力を挫かれながら、黙って
自分と戦い続けた。常に予見されていた

自分との長い戦いであり、答えられない
質問だった。手はなんのために
あるのか。最初の道具を
産み出すのに先立つ
無原罪の懐胎なのか。「自由にしてあげよう。
しかし祝福は与えない。お前の作り出す
いろいろなものへ使者として行き
私の存在を伝えなさい」と神は言った。

言　　葉

ペンが現われたので　神が言った、
「人であることはどんなことなのか
書いてみなさい」と。すると私の手は
裸のページの上で長い間ためらった――

その紙の空白に　道に迷った
旅人の足跡のように
文字が形を取って
現われるまで――そして私は「淋しい」

という言葉を書いた。そしたら手がそれを
消そうと動いていた。しかし人生の窓で
待っているすべてのものの声が
「本当だ」と高く叫んだ。

そ　　こ

そこはよその国だ。
そこには　知っている

言葉はない。色でさえ

違う。

そこの住民が目を使う時
見るのは形ではなく それらの間の
距離にすぎない。行くとするなら
旅人のいつもの
方角ではなくて 横道であり、
屈折した時間の目盛の
鏡を通る。早いうちに彼らに会うなら、
影がないことから
わかるだろう。あなたの問題は

彼らの過去にある。

彼らの解決しようとするものは
あなたが考えることの
できないものだ。異種交配の
実験の中で、大きくなる
精神の顕微鏡の下で、彼らは
人間のウィルスを孤立させ、無関心の
激しさの中で それを焼きつくしている。

ア ー メ ン

みんなその手はずになっていた —
みごもった処女、ベツレヘムでの
誕生、エルサレムにむかっの
骨の折れる不毛な旅。預言者がそれを
予言し、聖書は彼にそれを受け入れるように
しむけた。ユダはすっぱいキスで
自分の仕事をした。それ以外に
何ができたか。

賢い老齡、

長く続けることで与えられる名誉 — これらは
救い主のものではない。彼は
殺されなければならなかった — 積もる罪責によって
得られる救い。心の暗黒に
根を持つこの木は神に
植えられた — 現存する
最初のまた木。もし人が愛を
しりぞけるといことが明らかにされないなら、人生に意味はない。
神には殉教者が要だ。
穏やかな目が歪んだ勝利の形で
十字架からみつめる。人々の捧げ物が
小さくても、神は全く気にしない。

ウェールズの夏

彼らは角笛を鳴らし続ける。
谷間にそのこだまが満ちる。
消えた王国からの声が 時の
奥深くから 彼らに
答える。ここには死者たちの
眠りはない。死者たちはよみがえって
嘆く。あらゆる所は目覚めて
涙を流す昔の人々の悲しい合唱だ。

勝つのは機械だ。
その存在のため 大地は
蟻^{ぎよう}痒を患う。平和の方を
選ぼうとしたのに 土地は
腸を開かれた。子供らが何の
思慮もなく それを乱雑にいじくり回す。

神の物語

千年が過ぎ去った。
釈迦は菩提樹の下に座って
詩を作っていた。神は昔のように

空で燃えた。もう帰ろうと
しない神を家族は
待った。私の父と母は

誰なのか。神は脇腹の穴に
指で触れた。そこから緑の木が
生え出た。砂漠は

聖者を吐き出した。教皇の指輪は
蛇のキスのように致命的だ。芸術と詩は
ゆっくり効くあの毒を飲んだ。神は

乾いた聖杯をのぞき込み
機械の冷たい接触を手に
感じ 鉄の祭壇に

近づいた。「どこにいるのか」と
神は叫び 自分を求めて
口のきけない歯車と疲れを知らぬカム軸の中に入って行った。

あの場所

12ばかりの委員会に仕えた。
激しい議論はするが、内容のあることはほとんど言わず、
最後には共に拍手をした。あとで残ったものを

吟味し、権力は自分のものではないと
認め、他の者たちには毒舌を浴びせた — このように権力を操る
匿名の者たちだ、私たちは。人生は小さく、
灰色になり、内部の匂いそのものになる。風の通りぬけたあとの海で
澄んだ空気が鼻孔に
入ってくる機会を 努めて
取り戻そうとした。雨の
ひどい朝のあとの
あるひととき、雲がはれ 風が
落ちた。自然の
復活があり、私たちはそれと共に
聖油を塗られた空に
出た。「これを覚えておきましょう」と
あなたに言いたかった。しかし私たちが
発見し 求めながら余生を
過そうとした あの
雨の弓に囲まれた緑の島では
時制は場違いだった。

中継放送

スイッチを入れて 合わせる —
惑星の人々が
素晴らしい言葉で
天気を論じている！ 数千年にわたって
話し言葉が発生していた — 丘の傾斜の
あの木々の列が
動くように見える。山を登っている
人のことを思う。その人は今
霊の酸素不足のために
立ち止まる。容易な方の選択が、

半分は登ったという自己満足が
彼を取り囲む。自分の潜在力を
解き放すために 苦勞して
脱け出してきた谷間から 悪臭が
立ちのぼってくるから、彼には頂上からの
息が必要だ、他の山々に登った
登山家たちが立てたあの
きらめく旗の記憶が必要だ、
そのあと彼らは下ったのではなく
自分の選んだ傾斜を辿って
登っていったのだ。

祈 り

彼は跪き

自分の祈りをふさわしくないものとして
捨てた。ひとつずつ

祈りは唇にやってきては呑みこまれたが
胆汁はなかった。

昔の祈りに

もどり、「何のために祈るかを

教えて下さい」と言った。耳を
傾けた。祈りの

嵐のあとには、静かな 小さい
声もなく、ただ幽霊たちが、過去の

執り成しの被害者たちが
行進してきた。彼は手を

杯のように差し出した、生命の
脇腹から流れ出てくる血を

受け取るかのように。手は
口のように乾いた

ままだった。しかし祈りは生まれた —
私を精神の長い早魘から
解き放って下さい。落葉性の十字架から
木の葉を私たちの上に
落して下さい。私たちを
きれいに洗い、秋を豊かな
木の葉の噴水で金色に変えて下さい。

道 具

それで何もなかったのか？
何もなかった。こだまは？
誰が話したのか？ あったのは空虚と、
みつめて 似顔を探す
顔だった。不在を探る
思いだった。神は
彼が裸で
隠れていることを知っていた。細菌が
群がり、そのアルファベットが
長くなった。それを伝える舌は
どこにあったのか？ 苦痛だ、と声が
言った。その被造物が
精神を暗黒の上に折りたたんで
立ち上がった。知恵に
哀願するかのように
手を差し出すと、そこで
道具が光った。木の
取るべき道がきびしくなった。神は
木全体から彼に
話しかけた、しかし道具の音が
彼を溺れさせた。彼は裸になって

出てきた。体の中の
道具の横柄さに苦しみながら、
「許して下さい」と言った。

聖金曜日

静かだった。今は九時で、すべてがうまく
いったとは限らない、ということを除いては
見張りに叫ぶべきことはあったか？ 暗黒が
のぼり始めた、しかし照らし出されたのは

精神ではなかった。その大工は
上手に仕事をして 大工の責任を
負った。十字架は 木材を超える
美術の力の実例だった。

局 留 め

十字架が人間の車輪の下で碎けて
塵になるにしても、または新らしい時代への
記念碑としてきらきら輝くにしても、それが
どんな風だったかをあなたに知ってもらいたい。

一つの教会があって一人の男が
そこに仕えた — 冬の丘の上にある
冷え冷えとした光をあびたそこには
ほんの僅かの人しか礼拝にこなかった、彼らは
自分のまわりに文化の廃虚のように落ちている
石の間を動いた — 彼らはあまりにも弱すぎたのでそれを
元に戻すことができず、またあまりにも負しすぎたので

願ったこともない人生の
終りを待つこと以外には
何もできなかつた。

司祭がやってきて

誰も聞かないしわがれたベルを
引っ張り、そのあと年月のかびで
すっぱくなったあの暗黒の場所へ
入っていったものだ。蜘蛛が聖杯から
走り出し、ぶどう酒がその中で
彼以外の誰にも望まれずに 少しの間
冷たく横たわり、ろうそくは
風が屋根を突くごとに
消えそうになった。彼は
あの貧しい食事をしながら、自分の顔が
窓のひび割れたガラスからじっと
自分をみつめているのを見たものだ、
この世をのりこえた世界の住人のように
唇を動かしながら。

それから湿気のある

聖具室の書き込み帳にもどって
自分の名前とほとんど意識していない
日付を書いた、日曜日、
また次の日曜日も — そしてその場所は
膝まで沈み、大地は季節から季節へと
大きな鋳物工場の車輪のように
回転して、友よ、何が起きたかを
知ろうとするあなたを作り出した。

髪をとかす女性

—ドガー

それで髪も

弾けるのか？

彼女は髪を垂らして

それでソナタを

弾く。髪の褐色の

チェロ、腕は

弾いている弓。画家よ、

あなたは機敏な

絵筆で この沈黙の音楽を

描いてくれた。描き残したものは

何もない。

青と緑、

彼女のソフトドレスの

降り止まぬ雪、柔らかな

肉体上の光 — これらが知らせてくれる、

どんな楽譜から彼女が弾いているかを。

息 子

お前を欲しがったのはお前の母だった。

私が入った時には、お前はすでに

半分でき上がっていた。しかし私は飢えを、
自分から自分を生み出す淋しさを
否定できようか。お前が
現われた時、自分のやったことには
恥はあったが、後悔は
しなかった。人間と呼ばれるには
あまりにも小さすぎるものへの
哀れみだけがあった。お前の掌は
植物のようで、耳は私の怒鳴り声を浴びる
貝殻だった。お前のたてる泣き声は
踏みつぶされる盲目の動物と
同じだった。苦痛はまだ悲嘆になってはいなかった。

執り成し

そして神はあるものに言う。「数字と
計算で、私に
やってこい。星々の間にある
角度の中に、私の王国の
方程式の中に、
私の美を見よ。レンズを
持ってきて、私の広がり
を礼拝せよ。遙かな外にも
遙かな内にも、常に
それに比例してそれだけ多く
私は存在する」そして他のものには、
「私はあなたの存在の
中心部で
燃えている茂みだ。あなたは
知識を捨て、心を
裸にして、私の所に

こなければいけない」と言い、この私には
こう言う、「お前の大きな
腹のために、お前の冷え冷えとした
感情のために、私は
最も謙虚なものゝ姿で、
お前が材木に変えてしまったあの
背の高い木に吊るされた
男の姿で、お前の所に
くるだろう、だからお前は私に気がつくことはないだろう」

対 話

「私はあのようにならなければならなかった」

「では神は束縛されているのですか？」

「そのようにも言えるが、材料が——」

「誰の材料ですか？」

「あなたはわかっていない。

改良の問題だ、それはいつも

ここにあった」

「恐竜、

でしょう！」

「恐竜はあなたを植えるために

大地を整える

私の鋤だった」

「初めに種子、

それから人ですか！ いつ少数が

多数になるのですか？あなたが私を

認めた瞬間がありました。私は窓でしたか、

鏡でしたか？」

「あなたは私の息の

浪費、私の想像の

犠牲だ。しかし大地を
掃ききよめる時、
良く思い出すのは
忍耐強い耕作と
頑固な厚い土だ。今必要なのは
骨ではなくて、霊の
化学だ。心は
硬くなった。大人の精神のるつぼで
それをもう少し長く
実験しなければいけない」

チャペル

本通りから少し離れた
前世紀の灰色の中にひっそり
そのチャペルがある、観光客が
車を止めて訪れるほどの
魅力もない醜い建物。人と車が通りすぎ、
川が通りすぎ、雲の影が
素速く通りすぎる、そしてチャペルは
少しずつ草の中に沈んでゆく。

しかし、こんな夕方、かってここで
聴衆を取り囲もうとしていた
暗がりの中で、説教者に
火がつき、それが絶えず
不思議な光で
燃え続けた。彼らは
まわりの不毛な山々の
輝きを見て、荒々しくアーメンを
歌い、きわどい所で救われた、

今の人たちはこのようには救われない。

歓 迎

雲は景色のように
褐色だった。むっつりした人たちが
自分たちの傷をもてあそびながら
そこで働いていた。褐色のものが
彼らの心に入った。
それで神が
見えなくなった。そのことが時折
神を心配させた。明るい緑で
身を飾ってみたが、その場所の風が
神を焼いた。神は誰にも気づかれない
幽霊だった。死んだ木に
釘付けにされた肉体だった。木から下りた時、
誰も喜ばなかった。神は堅い土の
もろい外皮で、
枯葉のように風に吹きとばされた。

引き下がって

よく考え、精神の源で
自分を若返らせた。白だ、と思った。
白い鳥として この人たちを
訪れよう、羽毛は
彼らの冬になるだろう。その時、彼らは
神に気がつき、黙って
とびかかり、踏みつけた —
神が彼らから除いてやった
褐色の土を持ち出して その中に。

損 害

歲月久しい真理の探求を
忘れていた、
そのためにここにいたのに。他の煩いが

私を捕えたのだ。体の
執拗な要求。若い女性の
手招き。これほど

靈妙に見えたことのなかった
金銭。それは被造物の
血管を循環する

神の血だった。私はそれに
聖餐のようにあずかり、
家に帰る途中 いろいろな声に

呼ばれて
迷ってしまった。遠ざかる未来に
後ろ向きに

進んでゆくと 遠近法の
使用を忘れて、子供たちに
散文を買うために

詩を借りた。過去は貧しい
王で、王冠を
歴史家に手放した。唯一の

損害が愛である
あの金属の戦争を

私は毎日続けていた。

問 題

この問題があった。
頭がそれを熟考した。
肉体が太陽の下で己れを
楽しんだ。それを避ける、それを避ける、
と風が囁いた。頭が
居眠りをした。7つの帝国が
風に吹かれて砂に沈んだ。ある民族がアテネで
立ち上がった。その問題が
彼らを認めはしたが、彼らの盲目の彫刻に
たじろがされはしなかった。神の子か？
人の子か？エルサレムで
この問題は新しい形を与えられた。
十字架が異邦人たちに無意味な
解決を申し出た。その影の下で彼らの骨は
白くなった。哲学者は自分の前提に
洗礼を施した。問題は
錬金術師の地下室の上に横たわった。

精 査

あなたが生きていたことは誰も知らないだろう、
もし私があなたの墓の
原因不明のうねりを
発見しなかったなら — それはみごもった
女の腹の
初期の隆起に似ていた。今そこに

入れば、あなたの骨が肉もないのに
抱き合っていることに、骨の崩れた建築が
非難していることに、頭蓋骨は
光ってはいるが思考は
していないことに、気がつくだろう。

忘れられた言語であなたが

何と呼ばれていたかを知ることは
ためになるだろうか？ 私たちのあごは
子音を支えるにはもろくは
ないか？ しかしそれは私たちのものと同様に
舌の上でバランスを保ち、耳の
回廊にこだまする — 噴火が沈黙する
合間合間に。なんと
優しく 女はそれを
操ることか、自分の毛深い体を
あなたの体にもたせかけながら。あなたの
楽器はどこにあるのか？ はしばみの管楽器は？
雄牛の角は？ この凶暴な惑星における
あなたの淋しさを
伝えるものは？

この惑星を私たちはゆっくり

飼い馴らす。しかし時々それは
逆らって立つ、その時私たちは
あなたが火をたきいれた
原始の影をもう一度見る。私たちはあなたより
頭がいい。私たちの悪夢は
知的だ。しかしレンズの凶暴な内面を
みつめようとする精神の強い衝動から
覚めることは決してない。

花

富を要求したら、
あなたは大地と海と
 広い空の
無限の拡がりを私に与えた。これらを
所有するためには退かなければならないと
 見た時に悟った。私は眼と
 耳を差し出して
あなたの見つめる
 影の中の
 音のない暗闇に住んだ。
 魂が
 私の中で成長し、その香りで
私を満たした。
 座っている場所のそばの
見えない花について
 私が話すのを聞くために、
 人々が四方から
やってきた。その花の根は
土の中にはないし、その花びらは
広い海の色でもなかった。それは
 自分自身の空を上を持ち、
 あなたの行き来する虹が
織り込まれている独自の種類だった。

ト ム

自分を見ているのが神だと
気がついた瞬間
彼は狂った。神がどんなだったかを

正確に話すことのできる
唯一の男は、沈黙にではなく
獣の語法に
屈服した。私たちは彼の近くに
行った。「神はどんなだった？」獣の目が
回転した。腕が一杯に伸びた。彼は
十字架になり、その上で
記憶が苦しんだ。「神は何を話したの？」
「ヤー、ヤー、ヤー」唾液がねじれた口から
おしゃべりした。あの神の愛のため、彼は
幼ない子供たちを死ぬまで抱きしめるだろう。

自画像

あの諦めきった顔つき！ ほらこれが私だ、
とそれは言う。59才、
禿げあがり、若い娘たちの挑発を
避けて通る。今や時間は
尽きようとしているが、魂は
未完成だ。そしてこれは自分がとったポーズの
肖像画ではないことを
心は知っている。唇をきりっと
結べ。あまりにも多くの落胆が
口を隅の方で
折りたたんだ。このしわを伸ばす
手術はない。光がそれを
残酷にもてあそび、精神は
たじろぐ。あのわざのすべてが、
人生が湾曲した鼻孔に
刻みつけられて、それを見ていると遂には
胸がむかついてくる。急ぐ目が

立ち止まり、引き離された喜びが
追いついてくるのを待つ。

耕やすピーター

キリスト御自身のようにずたずたにされた
褐色の砕け波の
表面を、ほら かかしが
歩き、それに呼ばれてこの男が
近づいた — 自分の下は
数フィートの深さだったが、
自分の手で作ったものを
信じていたから、
まごつきながらも、沈まずに
浮いていて、空の小便で
火傷した — お前の救い主の顔は
わら製だ と告げる
街道からの叫び声は聞こえなかった。

アン・グリフィス

そのように神は彼女に語った —
彼女は教育のない 田舎出の
貧しい小娘だった。「あなたの体の
白い鍵盤の上で 私を
弾いてくれ」と言った。「熟れている
てんにんかの木の下であなたを
待っている間、あなたが
いるはずのない花婿たちのために
踊るのを見た。ここの人たちは薄い

精神の賛美歌の中でだけ、
不毛な説教と祈りの中でだけ
私を知っている。私は民族の古い木に
にせものの涙でかたく
釘付けにされた生ける
神だ。泉の水に私は渴く、
渴く。私のためにそれをあなたの心の泉から
くみ上げてくれ、そしたらキスされたことのない
あなたの唇の上で、それをぶどう酒に変えるだろう」

レインの月

イエスの月の最後の
4分の1が暗闇に
屈服した。蛇が
卵を消化する。影の
沈黙の会衆と
海の音だけで一杯の
この石の教会に
跪いていると、
イエーツが正しかったと
簡単に信じることができる。まるで
聖歌隊が歌わないかのように、貝殻が
彼らを呑み込んだ。潮が
聖書に押し寄せる。パンのもろい
奇蹟に鐘は誰も
連れてこない。壁の中の粒子が
亜麻色のガラスの中に
走って戻るのを
砂は待っている。宗教は終わった、
新しい月の体から

何が生まれてくるのか

誰にもわからない。

しかし声が耳に

響く、「人よ、なぜそんなに

急ぐのか？この海は

洗礼を受けている。教区には

時が剥ぐことのできない

聖者の名前がある。予想以上に

大きくなりすぎた都市で 人々は

もう一度巡礼者になり、

この場所へ来るのでないなら、

自分たちの魂の中にそれを

再創造するだろう。あなたはいつまでも

跪いていなければならない。この月が

大地の扱いにくい影の中を

進むように、祈りにも

それ自身の側面がある」

突 然

前からいつもわかっていたことだが

彼は前触れもなくやってくるだろう、

目立つことは 騒々しさが

ないことだけだ。真理はそのように

考える人に現れるに違いない。答えは

そのように 実験のある段階で 静かに

現れるに違いない。私は彼を見た、

目でだけではなく、全

存在で — 聖杯が海で

溢れるように、私は

彼で溢れた。しかし彼は

前と同じだけしかそこにいなかった。
彼の領域は後光のささない
者たちに占められていた。
あなたは彼の傷を意識せずに
彼の中に手を
差し込むことができる。気づかずに
十字架の足もとで
賭博師たちはさいを
投げ続けていた。しかし彼らが博打で
取ろうとしていた目に見えない衣服は
もうそこにはなかった。彼が
よみがえりの体にそれを着けていたのだ。

姑

人生も又 己れと戦う。
失意の領域と共に進むあの
愛のない暗い国に
入ってゆく時、姑は
嫁をそこに
ひきずりこんで
復讐をする。「嫁は私から
息子を取った。今 嫁から
息子を引離す」 姑は嫁に寄りかかり、
あなたはいい人と囁き、心の針で縫う
経かたびらのために
嫁の背たけをみる。嫁は輝き、あの
汚れない鏡のように振舞う — それを
人生が覗くと、引き裂かれた己れが見える。

好 み

受け皿にこぼれ水さえなかったら、
チャーサーを好んでいた。

または踊り子のように型通りに動く
謹厳なエドモンド・スペンサーを。

しかし実を言うと、シェークスピアの一撃と
突きは書棚には

なくてはならないしろものだ。次には
ダンの薄い、知的な笑い。

ドライデンにはがまんがならなかった、
ポープの上品ぶった

兄弟殺しにもだ。ジョナサン・スィフトには
勇気はあるが高めるところがない。

しかし心の湖に見入る
ワーズワース — 彼を受け入れる。

時にはパーシィ・シェリイを。
バイロンをもだ、但し韻律だけのため。

テニスン？ブラウニング？彼らの名を
言うとしたら、慣例からだけだ、

前者の母音のテクニクと後者の
道徳的な類にもかかわらず。

それからハーディ — 彼は多くの人には
大詩人だが、私にはただの老練家で

自分のビクトリヤ風の息でおおわれている
まやかしの荒野で足をひきずっている。

そして批評家が衝動的な性急さで
詩人に地位を与えようとする

今世紀に入ると、私は微笑せずにはいられない、
名声の回転扉で混雑する

顔のない、形のないアミーバーを、
それが自由詩を分泌するのを。

荒っほい

神の髭のように緑色にうねっている草を
摘んでいる野うさぎを
みつめている狼を
驚が見ているのを、神は見た。神は退いた。
完全だった。それは血と糞の
自動調節機械だった。ひとつ足りなかった。
神は海水の中から、自分のおぼろげな姿を
すくい取り、それに空気を吹き込み、
赤い血球が回転するように調整した。やがて
それは驚と狼と野うさぎに
助けてくれと泣き叫ばせた。草だけが
抵抗した。想像力を暖めるために
それは草を使った。神は細菌をひとつかみ取って
滑らかな肉体に植えた。その収穫は

奇妙なものだった。手足は淫らな
質問の形になり、頭がふくれ、目から膿の
涙が出てきた。雷の音が、
神の高らかな、こらえきれない笑い声が
響き、脇腹には受けた傷の一縫いのように、イエスがあった。

隔 た り

悩まなかったひとつのことは
完全ということだった。すでに彼らのもの
だったから。彼らの手は司祭の手のように
暗い中で動き、裸の壁に
祝福を与えた。被造物の私生活を
侵害するように、絵がそこに
現われた。作品を完成して、彼らは
引き下がった。それへの疑問を私たちに
残して — 彼らの天才を除いて
私たちはすべてを受け継ぐ。

これは墮罪以前の
ことだった。彼らと私たちとの間のどこかで
精神は知識の木によじ登って
芸術の禁じられた主題を見た、
人生が己れをうつした鏡の中に
内部の空虚さを見た、それでその挫折を
にせの金属に、機械の
冷たい行為に注ぎ始めた。

ベネチャノによる受胎告知

天使には翼があり

少女は

後光に取りまかれていた 距離が

両者の間にあり

二人と私たちとの間にも距離がある

長い小道のむこうにドアがあるが

彼が入ってきたのは

そこからではない

その唇には女なら誰でも

聞きたがるものがあり

手には彼女から取りあげた

花がある

イワン・カラマーゾフ

そう、彼がどんなものか知っている。

一種のあり得ないロボットで、

その中に祈りを切符のように

差しこむと、しばらくしてから

「認められない」という言葉が

上に書かれて戻されてくる。

こんな神なら拒否する。しかし

もしあなたが言うように、神が存在するなら、

そして私の行為が神への

侮辱なら、私は罰せられてもよい。

悲鳴はあげないだろう。正しいと

証明されることは一生の懲罰に

価する。恨みを晴らす神を

持つことは有利な立場に

なることだ、大地が開いて

人を暗い裂け目に迎えるまでは――

その裂け目でエリヤよりも安全に

人は知るだろう、神が風と
火と地震の囁きの中で
らっぱを吹いてはいるが、
利己愛という暴君から
人を永久に解き放つ
虫の静かな、小さな声の中にはいないことを。

あのように

彼は覚えている、若い頃
愛について読んでいた時、
恋人が静かに部屋に
入ってきて、愛の描写に
挑戦したことを —
本をおいて彼の説明に
耳を傾けたことを —
多分雨が降っていて 風が強かった。

セラ！ 今や行かなければいけないのは
彼だ — 良く知っている彼女の体の
散文から自分の本に、
あまりにも喜んで本をおいたあの
昔の夜の思い出に
もどらなければいけないのは彼だ。

継 続

初めに言葉があった。
その言葉は話されたのか？ 確かに
言葉があった。それに理性を持った精神が

しがみついている。しかし空の顔は
変らなかった。月やなじみになった
黄道帯は劣った
表現だった — 人に便宜を与えたのは
これらのものだった。人は記憶の
深い眠りに落ち、音楽が
目覚めさせてくれるまで自分の肋骨の弦を
もてあそんだ。そして引き裂かれた脇腹に
ぶっきらぼうに手を差し出すと火が
燃え、子供らの多くの声が
呼んだ。

人は何度も焼かれるために
もどった — 人の上に夜が鋤をもって
進み、星の俄雨が降り、暗黒は
許可もなく彼を見ている
神の顔だった。

山のクリスマス

彼らは雪を越えて パンの中のもっと
純粋な雪にやってきて、大きな手の中で
いじくりまわし、獣のように
唇をつけ、ぶどう酒の光る
暗い聖杯をのぞきこみ、舌に
鋭く感じて体を震わせた、罪を
思い出したかのように — そして愛が
心のうまやで少しの間叫ぶのを聞いた。

彼らは立って、12月の佻しい
光にさらされている貧しい
小作地へ帰った。地平線が縮まって、

木のあるひとつの小さな

石だらけの野原になった、そこでは生まれることを望みはしたが
恐怖ですくむ体に 季節が釘を打ちつけていた。

戦 い

あなたには名前がない。
私たちは一日中あなたと
格闘し、今 夜が、
私たちが求めて脱け出した暗黒が
近づく。あなたは名を伏せたまま
しりぞき、私たちは傷の、
脱臼の手当てをする。

言葉の落度には
矯正がない。物理学者は
あなたの大きさを教え、化学者は
あなたの思考の成分を
教える。しかしあなたが誰であるかは
明らかにならない。なぜあなたが
語彙の無邪気な
行進の上で好んで
私たちに挑戦し、沈黙で
あざけるのかわからない。私たちは死ぬ、
偉大な詩の第一線であなたの抵抗には
終りがないと知って、死ぬ。

場 面

親類のひとりがその時

中国にいた。どんな神にむけてかは
知らないが、そのまま
祈りの形である^{みんちゆう}明朝のつぼには
静けさがある。陽差しを浴びて
部屋に座し、自分の脈をみつめていると
そこに機械のリズムのあることに
気づく — 丁度私たちが宇宙の
中心にいて、音楽を力に変える
偉大なダイナモの鼓動を
バッハのフーガの中に
聞く瞬間があるように。話し言葉を超える
言語があつて、現代の範疇を
中止することで
学べるのだ。想像の中をあちこち
急いで歩き廻って、その家具には
時代はないが、部屋のすべてに
魂の焦立ちをなだめるような調和があることに
気がつく。それで巨大な夜に、
目覚めながら、私は星々の合図を
再解釈し、永遠の鏡の中に
「愛」と名づけられるのに十分なほど恐ろしい
神秘的なものの姿を見た。

聖マリヤの泉

彼らはそれを予知したのではなくて、
私たちに遺贈してくれたのだ。
澄んだ水は、海の白い霜が
まじって、時には少し
塩からいが、それもすぐに解ける。

自分の姿を無視して、私はその静かな
根元をじっと見る — そこには
硬貨が沈んでいる、そこに住む
純粋な霊に対する 人々からの
変色した捧げ物。その霊はずっとそこに
住み続け、渴いている者には
己れを与え、もっと欲しが
る。迷信深い者には
与えることを差し控える。

ど こ か に

あなたがそこにいたことを示すために
何かを持ちかえる — 眠っている間に
盗み取った神の
巻毛、霊の庭園の
写真。言われてきたように、
旅の目的は
到着することではなくて、花粉を満載して
家に帰ることだ — あなたはそれを
心が食べる蜜に仕上げるだろう。

絶えず出発する港、
ほんの少しだけ着陸する空港 —
滞在があまりに短かすぎるから
それが何を思い出させるのかには
気がつかない — このようなものでないなら
人生とは何なのか？ そしていつも互の
中に、死ぬに値するような
経験の証拠を私たちは求める。

R. S. トーマス詩集『霊の実験室』

この人が着ていた火のシャツは確かに
あるのか？ それは今、英雄たちの館に
珍しい羊毛のようにかけられているのか？
これらの夫婦が
自分たちの結婚をしっかりとした泉に
浸したのは確かか？ このような影を投げる
ひとつの光が、それを探す正当な理由として
どこかにあるのは確かか？

マルゲット

彼女はどのように計画されたのか？
それともこれは人生の
はき捨てのひとつか？ 小柄で、まだ未熟のうちに
学校からもぎ取られ、やもめの母に
任せさせられた — その母は少女を無知のままに
しておく。めんどりに餌を与え、
その言葉をしゃべり、その
仲間になり、すばしっこくて、すぐに
替え、鋭い
目と耳を持っている。そこに
行くと、私の心に
彼女が止まる。その羽毛を
なでて なだめて
やりたい、「人生は
こんなものですよ」と。しかしその権利が
私にあるか？ もっと並な
女たちが豊かに
愛と自由と
金を手近に持っているのを
見てきた私に？ もし彼女に

ひとつあるとするなら、それは
小鳥の性格だ、小鳥のように
はしゃぐことだ。彼女はにわとりの中に
生きて動き、にわとりは期待の目差で
彼女を見る — そのにわとりと同じように
彼女には歌が拒否されている。

このように

あなたの想像するものはなんでも
形になった。話されない言葉は
何もない、行なわれなかった行為は
何もない。ぶどう酒は

聖杯の中で毒され、死体は
強姦された。一方 イザヤの
天使は熱い炭火をもって
あちこち飛ぶ。

セ ラ

破滅にむかう正直な人々の
行列、手が
風に荒れ、夢は彼らのうしろで
機械の後産のように
しなびる。英雄にとって
港は出港する
所だ。彼のつぼの中にある塩は
歴史なのか？ 私たちの確信を
持たない空に、自分たちの理性を

求める。イスラエルではかつて
思慮のない体の
純潔が霊に
犯されたが、
大地がそれに復讐をした。王たちは
条約の不毛のために
血管を開いた。国々は
鋼鉄の翼を持った天使たちの
工場にむかって進み、不必要な
メッセージを持ってあちこち
急ぎ廻った。知識の
地平線のむこうに、己れの
作り出したものではない砂漠の中に、自我は
そこにやってきたことの目的を求めた。

召 命

そして言葉がやってきた — 話したのは
神だったのか 悪魔だったのか? — あの
不毛の教区へ行きなさい、あなたの夢を
彼らに踏みつけさせなさい、沈黙が

知恵であることを学びなさい。風の冷たい
部屋に彼らが孤独にいるように、あなたも
孤独でいなさい。「私は飢えている、
飢えている、この人たちの

赤い糞にもかかわらず」と大地が
土の単調な歌をつぶやくのを
聞きなさい。彼らがひとりひとり
あなたの祈りの くしゃくしゃの

切符を持って、あの暗いドアを
通ってゆくのを見なさい。愚かな子供を
産み落とす時の 彼らの取り乱した喜びに
与かりなさい。あなたをみつめる

彼らの顔で、真理に対する
美の敗北で、魂が
体の炎に近い片隅を望んで
自分を売り渡すことで、あなたの

霊への信仰を吟味しなさい。あなたと
生命との間にある窓の薄さを学びなさい、
精神がそこを通りぬけようとするば、
自分が傷つくことを学びなさい。

生きている

生きている。それはあなただ、
神よ。外を見ても、私には死が
見えない。大地が動き、
海が動き、風が
豊かな旅を
続ける。多くの生物が
あなたの姿を映す — 花々は
あなたの色を、湖はあなたの計算の
正確さを。あなたが溢れ出ないほど
大きなものはない —
小さすぎて、あなたのわざが
あらわれないものも
ない。耳を傾けると

話しているのはあなただ。
あなたが暖かく伏している場所を
見つける。夜、目覚めると
不眠の星々の
集合都市がある。暗闇は
あなたの存在の深まりゆく
影だ。沈黙は
愛の存在の
物質交代におけるひとつの過程だ。

囚 人

「監獄からの詩だって！ 何に
ついての？」

「人生と神について」「監獄の中の
神だって？ ねえ、冗談
でしょう。神の顔は多分
格子戸の所で、人生のように
色あせている」

「神は看守に
さからいながら、一緒に
入ってきた。打ち勝たなければいけない
慈善の意識
以外の一体どこから
人の厳しさが
湧いてきたのか？」

「それでは打撃は
愛するものに対する神の
懲らしめだった！ どちらが
もっと祝福されたのか、
打つ方か、それとも

打たれる方か？」

「外も

同じだ。格子戸も壁も
すべてを明らかに
するだけだ。姿をくらました神よ。
私たちは空を、星と星との間の
距離をくまなく探す。
最後に見る場所は
監獄の中だ、肉と骨の中の
彼の隠れ場所だ」

「それでは

信じるのか？」

「詩は

証言だ。もし神の世界が
縮むのなら、それはより大きい幻を
生み出すためだった。神のいない
牧場や、ガラスのように
非人格的な動物の目は
神を伝えない。
独房のむき出しの
壁の上で、圧政者は
光りから遠ざかる時に、
自分の人間の姿が
小さくなるのをみつめる」

ど ち ら

そしてその本の中に

「神は愛なり」と書かれている。しかし頭を
あげると、そうではないことが
わかる。本にもどって、

ページにはさまれて、
このひとつの言葉の
匂いで重たくなった
大気をさまようか？ または言語

ではなく、人生が私に与える
打撃だけを信頼して、
条約を封印する
赤いしるしのように、それを身につけようか？

なくなった

咲いていた花があった。
手がそれをむしり取った。

流れている小川があった。
体がそれを汚した。

水の純粋な
鏡があった。顔がきて

のぞきこんだ。言葉が、
戦争が、条約があった。脚が大地を

踏みつけ、車輪がそれに
烙印を押した。それから爆発が

続いた。ちりがあり、
沈黙があった。ちりの中から

植物が生えた。露がその上で
形になった。小川が露から

にじみ出て鏡を
組み立てた。しかし鏡は空だった。

許 し

主よ、これにはどんな許しがあるのですか？

ある男がいて、あなたの手から
パンを食べたが、とびつきは
しなかった。しかし跪まずにいた時、
自分の中のどこかからくる哀れっぽい
笑い声に耳を
傾けた。笑うことは
神聖な喜びのこだまだと
教えられてきた。しかしこれは
神殿の中で犬が脚を
あげることだった。間違った時に
出てくる笑いを止めるすべはない——しかし
それに対する許しは一体あるのか？

彼は祈りから

脇腹をおさえている世界に
入っていったが、祈りに
もどることは嘔吐に
もどることだった、
望みはしなかったが
拒否できなかつた何かのために、
信じないところで感謝を
することだった。

これには許しが

ない、ただこの笑いを誰かに
なすりつける方法があるだけ。

結 婚

見あげる。あなたが過ぎ去る。
あなたの存在とその意味とを
読んだものに調和
させなければならぬ — 王や女王に、
権力を求める
彼らの戦争に。あなたにも自分の戦いがある。
私はあなたの味方だったのかと
自問する。死んだ女王の方が
生きている妻よりも
美しいのか？ 歴史の事実を
崇拝はするが、中立のままでは
いられない。あなたにはふさわしい
王がないから、私よりも
優れた詩人がここにおいて
あなたを描かないから、時はいつもあまりに
短かすぎるから、あなたは今何も言わずに
行かねばならない、過去へと同じように
未来に対しても
未知なるものとして — 仕事の合間に
ひとりの男が目を
あなたの上にとめている。

モントローズ

彼は花婿のように華麗に着飾り
陽気に断頭台へ行ったと言われる、
風のない勇気の朝に、レースが
白い霜のように彼の上におかれていた。

赤い血は結婚式の祝宴で
酒に変えられた生命の水だった。
花嫁はスコットランド、その結婚の
完成のために霊はこのようなものに頼る。

終 曲 部

そしてそれを拒否するのでは
なくて、それに
ふける。あの頃の
さわやかな日々。夜もまた
時の巨大な
焼却炉だ。「教えてくれ」と
声があった、それから質問の
愚かさの前で
沈黙した。

あの女は
ハワイにいた、そこだったか
それともボンベイだったか？ 私たちの間に
海だけがある、溺れた者の
画廊、私たちがのぼることのできない
階段。競技は
それ自身のルールだ、劇は
観客があるために

存在する。自分自身の物語を
読んでいるうちに、
存在しない
ページにやってきたので
本をおいた。

輝やく畑

太陽が雲の間から現われて少しの間
小さな畑を照らすのを
見たが、歩き続けて
それを忘れた。しかしそれは高価な
真珠、中に宝を宿した
ひとつの畑だった。それを手に入れるには
持っているすべてを与えなければ
いけないことを今悟った。人生は、遠ざかる

未来にむかって急ぐことでも、想像の過去に
憧れることでもない。それはモーゼが
燃える柴にむかってそれたように、
かつては若さと同じようにはかなく
見えたが、実はあなたを待ちうける
永遠である輝きにむかって、それることだ。

今

生きている間に、敗北を
認めて去っていった
人々 — 最上級が意味を
失った今は彼らは

何と言うだろう？ 彼らにとって
失敗だったことが、私たちが
理想を捨てたことが、高い芸術に
変った。前もって
知っていたなら、幸せに
なり得たろうか？ まだ
おりていかない底の
あることが
私たちの慰めになるのか？
急ぐ世紀の中の
あの少数の仲間のように、
脇にそれともう一度
あの庭に入るだけで充分なのか？ 熱い
門の所に天使がないなら、
何が芸術の
清澄さなのか？ 天使の剣は
時であり 私たちの不安な良心だ。

ラ ナ ン ノ

たびたびそこに立ち寄る。
そこには私のための
詩はない。しかし自分が一部である
せわしい往来とは
かわりがないというゼスチャーとして、
私は車を止め、
狭い小道をたどって
川におり、そのそばで
水にくっきり姿を映している
教会に入る。

今 礼拝はほとんど

行なわれぬ。仕切が隠すものは
何もない。私と神とは間に何の仲介もなく
顔と顔とを合わせる。人より古い
時があると水が静かに
言い続けているだけ。私は目を
開いていてもくらまない、
清澄の存在から私の霊に
そんなにも優しく光が入ってくる —
それは私が次にくるまで待っている。

尋 問

しかしその日、財務担当者は
尋ねるだろう、「壊れた頭より、
破産した預金残高を
残す方が良くないか？」と。

そしてキリストは新しい戦士たちに
気がつき、彼らのひどい鉛筆と
その数字の出血が彼の
いやされた脇腹を破るのを感じるだろう。

海をみつめる

灰色の広大な海 —
人が入る祈りの
領域に似ている。毎日
数年間
その上に目を置いてきた。
何かを待っていたのだったか？

ただ

意味のない

波立ちの絶えず

起るのを除いては 何も。

ああ しかしまれな鳥は

まれにしか来ない。それが来るのは

見ていない時か または時として

そこにいない時だ。

人々が膝をすり減らすように

目をすり減らさなければいけない。

私は岩の

隠者になり 風と

かすみを着けた。鳥で

満ちたかもしれない空白が

本当に美しい日々もあったー

鳥の不在は

その存在と同じだった。長い集中のあと

精神はあまりにもひとつになっているので、

みつめているのか祈っているのか

もうわからない。

良 し

老人が丘の上に来て

見おろし、谷間での若い頃を

思い出す。輝やく小川と

教会を眺め、子供らの叫びが

散らばるのを聞く。肉体の中の冷えが

死は今やあまり遠くないのを

告げる。それは生命の大枝の下の

影だ。庭には薬草が生えている。

R. S. トーマス詩集『霊の実験室』

鷹が捕えたばかりの餌食をつかんで
通りすぎる。風が野性の豆の匂いを
散らす。トラクターが大地の体を
手術する。孫がそこを
耕やしている。若い妻が
ケーキとお茶と暗い微笑を運ぶ。良し。